

幼稚園の園庭の鉄棒で幼児はどのようにして遊ぶか

—鉄棒の指導を求めて—

今村 光章^{*1}・長谷川 哲也^{*1}

本研究では、幼稚園に設置されている鉄棒において、幼児が自由遊び時間にどの程度遊んでいるのかについて調査した。また、幼児が鉄棒でどのように遊んでいるのか、その遊びの種類についても調査した。調査は一日1時間程度、10日間にわたって実施し、統計的なデータとしてまとめた。その結果、観察した時間内に延べ529人の幼児が鉄棒で遊んでおり、延べ1110回の鉄棒遊びが観察された。遊びの種類も豊富であった。園庭に設置されている鉄棒では、年少児・年中児・年長児どの年齢の幼児も頻繁に遊んでおり、高鉄棒・低鉄棒どちらも、どの年齢の幼児も遊びに来ていた。注目すべきは、基本的には女児のほうが鉄棒で遊んでいる割合が高く、年長になるほど高鉄棒で遊んでいることが明らかになった点である。このように、幼児は非常に頻繁に鉄棒で遊んでおり、その遊びに幅広い豊かさがあることが判明した。

〈キーワード〉幼児、鉄棒、遊び、体育

1. 本研究の目的と課題

本研究の目的は、幼稚園の園庭におかれている鉄棒で、幼児（3-6歳児）がどのように遊んでいるのかを実証的に明らかにすることである。幼児の自発的な鉄棒遊びの実態や鉄棒の使われ方を観察・調査することにより、今後の鉄棒に関する指導への示唆を得たい。

一般的に、幼稚園・保育所等の就学前教育施設の園庭には、ほとんどといっていいほど遊具がある。たとえば、ブランコ、すべり台、鉄棒、アスレチックやジャングルシム、または、滑り台が多方面に伸びている遊具や、クライミングネットなどが付設されている複合遊具とよばれるものがある。

なかでも、鉄棒は小学校の体育の時間にもつながるためか、その設置率は高い。だが、たいていの園では、鉄棒は園庭の中央部ではなく片隅におかれている。しかも、幼稚園児と鉄棒の先行研究が少ないことから、幼稚園教諭が意識的に熱心に鉄棒遊びを指導しているという印象がない。このように、幼児が積極的に遊んでいるイメージがない鉄棒である。だが、鉄棒では本当に幼児に遊ばれていないのか、遊ぶとすれば、どのような子どもが遊び、どうやって遊ばれているのかを明らかにする。

普段であり注目されない鉄棒に注目して、実証的なデータを示したい。

まず、データを示す前に、鉄棒の歴史を簡単に振り返りその位置づけを確認するとともに、先行研究について概観しておこう。

周知のように、鉄棒の起源は中世ヨーロッパにさかのぼる。ブラバント(Brabant)公国の画家ピーテル・ブリューゲル(Pieter Bruegel : 1525or30-1569)によって1560年頃に描かれた「子供の遊戯」の中に、駒つなぎの横木にぶら下がる子どもが描かれている。この「子供の遊戯」の絵の中央上部にある白い建物の前面の通りに、2本の立っている木に1本横に木が組み立てられ、2人の子どもがそれにぶら下がったりして遊んでいる様子が描かれている。この合計3本の木で組み立てられている「横木」が、鉄棒の起源だとされている(田代ら1994)。

この鉄棒の原案を発展させたのが、ドイツの教育者フリードリヒ・ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn 1778-1852)である。1811年に、ヤーンはハーゼンハイデ(Hasenheide)に体操学校を設け、その体操場に様々な運動用具を設けた。その中に木製の「横木」が設けられていた(藤本ら2004)。この横木は直径8cmとされている(村山1967)。現在、普及している鉄棒の太さは2.5cm~2.8cmであるた

^{*1} 岐阜大学教育学部

How do children play on the horizontal bars in a kindergarten? -Rethinking the teaching method of the activity on bars-

め、当時は太いバーであることが分かる。

その後ヤーンは自身の鉄棒運動の経験から、腕力の強化を重視し、懸垂系の運動、上がり技、回り技、下り技などの勢いをつけて行う運動の大きく二つの技を開発し、今日における鉄棒と鉄棒運動の原型が設けられた。

では、鉄棒が日本に伝えられたのはいつごろだろうか。藤本らは、「ヨーロッパ諸国では、鉄棒は横木運動から発展してきたものであり、その名称も発生当時の器具の材質を意味する『横木』が使われている。日本では1871年にアメリカを経てドイツ体操・スウェーデン体操が伝えられ、すでに材質が鉄であったため、鉄棒・金棒といわれた。我が国は、横木を経験せず、鉄製の時代からスタートした」（藤本ら 2004）と指摘する。「ドイツ体操・スウェーデン体操」とは、川村らによれば、1850年頃からヨーロッパで盛んになった体操論の中で生まれだされた体操法である。オリンピックで見られるような体操はドイツ体操がその源流である。日本には川瀬元九郎と井口あぐりによってスウェーデン体操が伝えられた（川村 1979）。この体操法は、主に姿勢矯正を目的とした体操法であり、現在でも小中学校の体育館の壁に取り付けられているような「肋木」を使い、肋木にぶら下がったまま静止したり、足を曲げ伸ばししたりするという体操法もそのひとつであった。このように、16世紀にヨーロッパで生まれた鉄棒が、諸外国を経て、19世紀後半の明治初期に日本に伝わってきた。それは体操との関連が深い。

では、鉄棒はどのように学校や幼稚園に普及していったのか。

明治初期より、器具を使用しない体操法は学校などで行われていたが、1887年に体操伝習所が設立されると、器具を使用した体操法が普及され始めた。藤本らによると、「1887年に体操伝習所が開設され、1891年に日曜祭日に体操場を解放し、一般市民に器械運動を指導している。そして1897年に東京の5つの公園（上野、芝、浅草、日本橋、深川）に器械を備え付け、随時市民に使用させ、これを指導するといったことが行なわれていた」という（藤本ら 2004）。

その後、1903年に定められた高等女学校の教授要目の内容に鉄棒が取り入れられた。1904年に設けられた体操遊戯取り調べ委員会が提出した「体操遊戯取調報告」（1905）には、中学校や師範学校の教授用器械として「横

木」「鉄棒」が記載されている。さらに、1913年に公布された学校体操要目にも用具として鉄棒の記載がある（池田ら 1979）。このことから、1900年代初めに鉄棒が学校に普及したことが読み取れる。

では、幼稚園にはいつごろから鉄棒が設置されたのか。

記録としては、1915年の岡山県倉敷小学校附設幼稚園の園庭平面図に描かれている鉄棒の図がある。また、倉敷小附設幼稚園以外で大正時代に鉄棒の記述を残していた幼稚園はなかったと指摘されている（田代ら 1994）。他方、日本保育学会誌「わが国における保育環境の歴史の変遷について」によると、各地の幼稚園記念誌や県の保育史を調査した結果、徳島県、岡山市立深砥、松本の幼稚園誌には、鉄棒の記述はない。茨城県土浦市、長崎大学附属、京都教育大学附属の大正時代の幼稚園誌にも、鉄棒の記述は出てこない。次に見受けられるのは、大阪教育大学附属幼稚園誌において、1927年に幼稚園を移転した際に園庭に鉄棒が設置されていたという記述で。同様に、大阪府愛珠幼稚園誌にも、1940年に高さが低めの鉄棒を設置したという記述がある。「日本幼児保育史」には、大正時代から園庭に固定遊具が置かれるようになったが、設置されている遊具に鉄棒の記載はない。戦後になって、よく行った遊びや好んでいた遊びを調査した項目で初めて鉄棒が記されている（日本保育学会 2010）

上記の文献等に依拠すれば、鉄棒は幼稚園に昭和初期に普及したものであると考えられる。しかし、日本の幼稚園において鉄棒の歴史は案外浅く、とくに戦後に浸透した、比較的最近の遊びだったと推察される。

このように、鉄棒の歴史は、世界的に見ると16世紀にまで遡る。はじめは棒につかまったり、ぶら下がったりして遊ばれていたものが、19世紀になると軍事教練の道具として導入された。日本に伝わった時にも教練の道具としての使われ方が色濃かった。そして、明治時代に学校などに広く鉄棒が普及したのち、昭和初期から幼稚園にも鉄棒が導入された。

このような経緯をへて幼稚園に普及した鉄棒であるが、幼児の鉄棒遊びに関する先行研究を調査するかぎり、わずかな先行研究があるのみであった。

まず、鉄棒がどの程度園庭に設置されているかについては、山本らが山口市内の11の幼稚園のうち7ヶ園に鉄棒が設置されており、保育所では8ヶ園のうち5ヶ園に

鉄棒が設置されているという結果を示した(山本 2008)。他方、小黒は新潟県内の130の幼稚園や保育所のうち127ヶ園に鉄棒が設置されていることを明らかにした(小黒1995)。しかし、宮沢・館林は、幼稚園・保育所の遊具の設置に関しては学校教育法等において触れられてはいるが、「これらにおける『必要な種類及び数』や『必要かつ適切な種類、数』について明確な基準」を定めているものはないと述べている(宮沢ら 2016)。

また、実際、幼児がどれほど鉄棒をできるかについては、橋本の調査によれば、足抜き回り・尻上がり・前回りは、卒園の時期までに9割を超える園児ができていたが、逆上がりだけは6割ほどであった。これは女児のみを対象とした調査であったが、鉄棒がどの園にも置かれている中で、必ずしもどの幼児も鉄棒で難なく遊べるわけではないのではないかと考えられる(橋本 1999)。保育者は、杉江・鈴木・村岡より、逆上りの事例で経験豊富な保育者ほど、幼児の気持ちに寄り添いながら逆上がりが成功するように励ましていくかわり方が見え、経験の浅い保育者は、体操の先生のような指導をしてしまう傾向があるということが明らかとなったが、一概に経験豊富な保育者のかわり方と、経験の浅い保育者のかわり方を決めつけることはできないと考える。

以上のように、鉄棒の歴史を踏まえ、当たり前のように幼稚園に設置されている鉄棒が、どのように遊ばれているのかをみていくことにしよう。

2 調査の概要

2-1 調査対象の園

本調査を行う幼稚園は、岐阜市内の私立ながら幼稚園である。この園は岐阜市の住宅地の中に存在する。園庭には、鉄棒をはじめ、アンパンマン号、ミニアスレチック、お家、お家つきすべり台といった、大小6つの遊具がある。

晴天で園庭の土が乾いている日には登園時・降園時ともに必ずといっていいほど、幼児は園庭に出て遊んでいる。砂遊びや鬼遊び、遊具を使った遊びなど、幼児はその日に自分がしたい遊びを見つけて遊んでいる。また、ながら幼稚園は「森のようちえん」「体操あそび」「英語あそび」などの幅広い教育を年齢別に取り入れており、それぞ

れを週1回ずつ行っている。

なお、一部の幼児は課外活動として「体操クラブ」に入っており、マット運動や跳び箱運動、鉄棒運動を体操専門の先生に教わっている。

2-2 調査日時

2017年10月13日から11月28日にかけて、週に2~3回の頻度で、合計13日間観察した。観察時間は9:00から10:00までである。その時間帯の設定理由は、おおむね朝1番早い園バスに乗る幼児が登園してから、最後の幼児が登園し終わり通常保育が始まるまでの自由遊び時間だからである。

2-3 調査の対象児

ながら幼稚園に通うすべての幼児を対象とした。2017年10月の時点での全幼児数は約190名である。各年齢別の内訳は、年少60名、年中66名、年長53名、未満児11名である。各クラスの所属を表す名札の色で幼児が何歳児であるかを確実に区別できる。また男女の内訳は、年少の男児が21名で女児が37名、年中の男児が31名で女児が32名、年長は男児が37名で女児が31名となっている。

2-4 調査・記録方法

ビデオカメラによる調査および記録である。鉄棒遊びを俯瞰でき、しかも幼児が立ち入ることのない園舎2階のベランダ、および園庭内の倉庫上にビデオカメラを設置し、定点観察を行った。

調査対象の鉄棒は、写真1の通り、ステンレス製の2連型である。本論文では、写真左部の鉄棒を「高鉄棒」、写真右部を「低鉄棒」と記すことにする。子どもたちもそのように呼んでいたからである。

各鉄棒の高さは、高鉄棒が87cm、低鉄棒が78.5cmである。



写真1: ながら幼稚園に設置されている鉄棒
(2017.10.27 撮影)

3 調査結果

3-1 観察記録ビデオ調査からみる幼児の鉄棒利用状況

幼児の鉄棒利用状況に関する実証的な研究の結果を示す。前述したように、2種類の鉄棒がある。高鉄棒と低鉄棒それぞれで何人の幼児が遊ぶのか、年齢別・男女別に調査した。鉄棒で遊んだ幼児の10日間の延べ人数は、以下の表1や図1「鉄棒で遊んだ幼児の10日間延べ人数」図2「年齢・鉄棒別遊んだ幼児の10日間延べ人数」のようになった。

3-2 幼児の自発的な鉄棒遊びの種類

本調査に先立って行った3回の予備調査の結果、鉄棒遊びは細かく分ければいくつにも分類できるが、ここでは、子どもの言葉を用いながら、鉄棒遊びを以下の全17種類——跳び上がり、布団干し、ぶら下がり(ブランコ)、ぶたのまるやき、こうもり、こうもり下り、すべり台、つばめ、足抜き回り、尻上がり、前回り、逆上がり、空中逆上がり、地球回り、鉄棒上に座る・跨いで乗る。二人技、腕立て伏せ——に分類した。

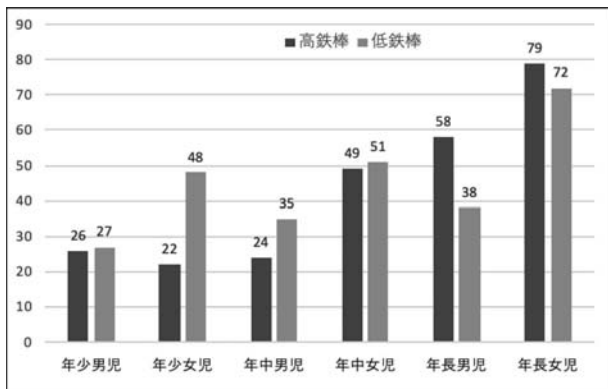


図1: 鉄棒で遊んだ幼児の10日間延べ人数(単位:人)

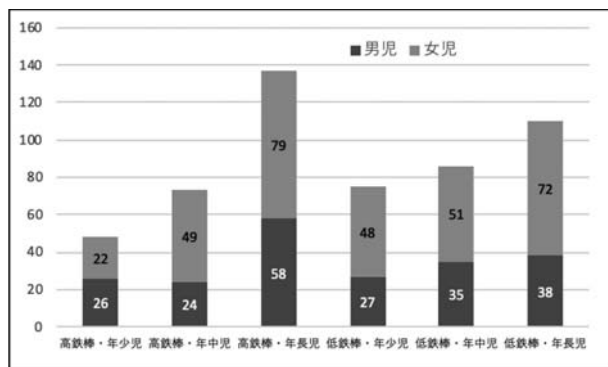


図2: 年齢・鉄棒別遊んだ幼児の10日間延べ人数(単位:人)

表1: 鉄棒で遊んだ幼児の10日間鉄棒延べ人数および全体数に占める割合(単位:人)

年齢	性別	高鉄棒	割合	低鉄棒	割合	延べ数	割合
年少	男児	26	10.1%	27	10.0%	53	10.0%
	女児	22	8.5%	48	17.7%	70	13.2%
年中	男児	24	9.3%	35	12.9%	59	11.2%
	女児	49	19.0%	51	18.8%	100	18.9%
年長	男児	58	22.5%	38	14.0%	96	18.1%
	女児	79	30.6%	72	26.6%	151	28.5%
合 計		258	100.0%	271	100.0%	529	100.0%

以下に各遊びの詳しい説明を示す。

- ・跳び上がり(跳び下り): 鉄棒に跳び乗り、降りる遊び。
- ・布団干し: 鉄棒に跳び上がった後、お腹を支点に前に倒れて両手を離し、ぶら下がる遊び。
- ・ぶら下がり: 両手で鉄棒をつかんで足を浮かすぶら下がり方が観察された。加えて、手や腕で鉄棒を抱え込みぶら下がる幼児も観察された。なお、右のぶら下がり方は幼児から「ブランコ」と呼ばれている。
- ・ぶたのまるやき: 両手で鉄棒をつかんだ後、両足を離して鉄棒を抱え込んでぶら下がる遊び。
- ・こうもり: 両ひざを鉄棒に引っ掛けた後、両手を離し逆さまにぶら下がる遊び。
- ・こうもり下り: こうもりの姿勢から、地面に手をつき、引っ掛けていた両足を下ろす遊び。
- ・すべり台: 両手を地面につけ、足を上げて鉄棒に引っ掛け、腕立て伏せのような体勢をつくる遊び。
- ・つばめ: 跳び上がった後、つばめのような姿勢をそのまま維持する遊び。あまりにも維持時間が短いと、「跳び上がり・跳び下り」になってしまう。
- ・足抜き回り: 足・おしりの順番に鉄棒の下をくぐらせて回る遊び。幼児は足抜き回りをやる際に足を鉄棒に引っかけてから回る。
- ・尻上がり: お尻の方から跳んで勢いをつけ、おしり・足の順番に鉄棒の下をくぐらせて回る遊び。
- ・前回り: 跳び上がった後、上体を前方に傾けて回転する遊び。
- ・逆上がり(空中逆上がり): 跳び上がり、つばめの姿勢から足を前後に振るなどして勢いをつけ、逆上がりの向きに1回転する遊び。その間、足が地面に着いてしまうと失敗となる。足が地面に着かずに回転できれば成功であり、そのまま連続して空中逆上がりができる。

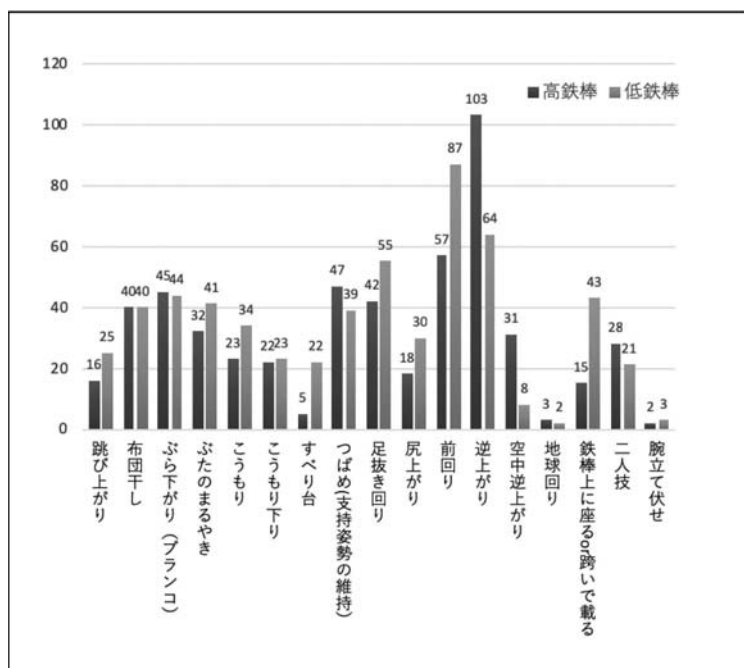


図 3 10 日間延べ観察数(単位:人)

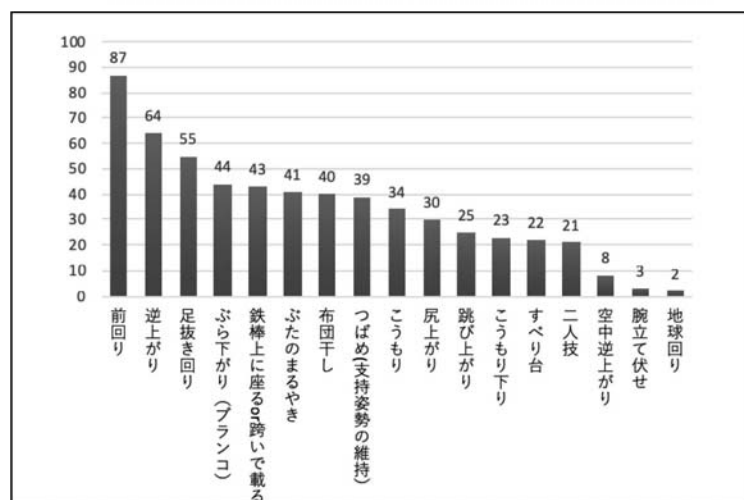


図 4 低鉄棒延べ遊んだ人数(単位:人)

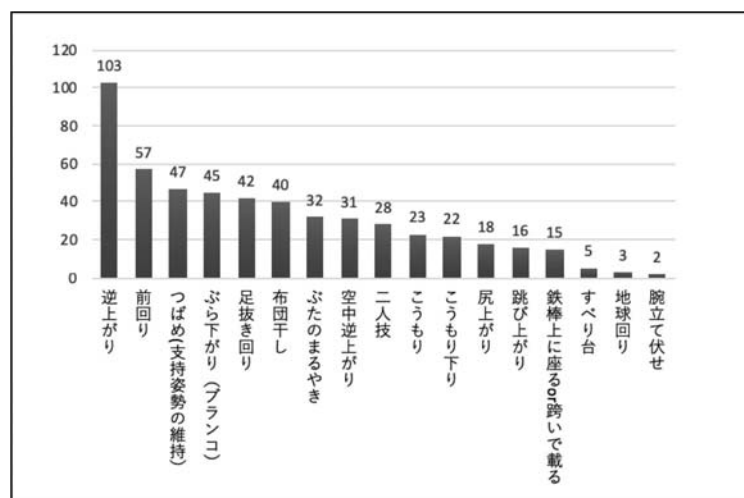


図 5 高鉄棒延べ遊んだ人数(単位:人)

・地球回り：両手を交差させてぶら下がり，両腕をひねって回転する遊び。

・鉄棒の上に座る or 跨いで乗る

・二人技：1 人が尻上がりのはじめの姿勢になっているその上に，もう 1 人がまたがって乗る遊び。

・腕立て伏せ：鉄棒を両手でつかんだ状態でされる腕立て伏せのことである。

予備調査による分類を踏まえ，各鉄棒でどのような遊びが行われているのかについて調査した。合わせて観察する鉄棒で遊ぶ幼児の人数と，観察できた遊びをカウントした。

鉄棒で遊ぶ幼児の人数は，鉄棒に触り，何かをしようとした幼児を，学年別さらに男女別にわけて調査した。各遊びで遊んだ人数は，その遊びで遊んだ幼児を，高鉄棒と低鉄棒に分けて集計した。なお，逆上がりや空中逆上りをしようとして失敗する幼児も多かったため，失敗した幼児も人数に入れている。

観察できた 17 種類の遊びを 10 日間で何人の幼児が遊んだか，延べ人数を集計したものが図 3 である。10 日間でどの遊びが多くの子に遊ばれたか，鉄棒ごとに人数の多い順に並べ替えたのが，図 4 と図 5 である。高鉄棒・低鉄棒の延べ遊んだ人数を総計すると図 6 のようになる。

4. 調査結果の考察

4-1 概略

本研究では，鉄棒で遊ぶ幼児の人数と，鉄棒で遊ばれる遊びの回数を，ビデオカメラにより正確に数え，集計した。まず，以下に本調査で明らかになったことをまとめる。

本調査の結果，10 日間で延べ 529 人の幼児が鉄棒で遊んだことが判明した。また，延べ 1110 回，鉄棒で遊びが行われた。

比較対象とする調査研究がないので，この数が多いか少ないかは評価できないが，調査対象の時間の 1 時間あたり，延べ約 50 名以上の幼

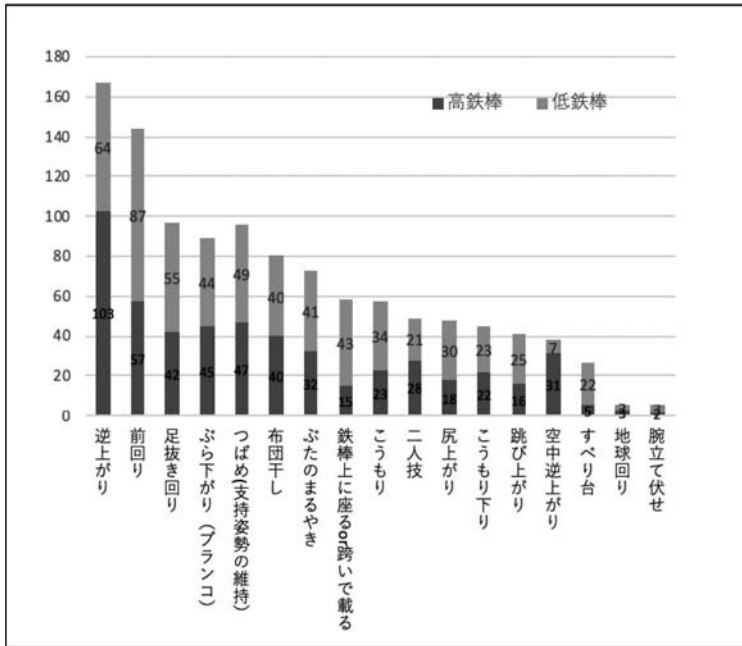


図 6 総計(単位:人)

児が、100 程度の遊びをして鉄棒で遊んでいることが分かる。単純計算であるが、一人が 2 つの遊びを試みて去っていく。また、園児約 190 名の 50 名程度であることから、4 人にひとり鉄棒で遊んでいることになる。実際の幼稚園での活動時間には、自由遊びの時間があり、数時間にわたることから、かなりの幼児が鉄棒で遊んでいることが判明した。

4-2 鉄棒で遊ぶ幼児の人数

では、鉄棒で遊ぶ幼児の人数についてまとめておこう。

各日ごとの高鉄棒・低鉄棒で遊ぶ幼児は、朝の 9 時から 10 時の間にそれぞれ 30 人程度、合計して延べ 60 人程度の幼児が遊びに来ることが分かった。低鉄棒には 35 人ほどの幼児が遊びに来ることもあった。

各年齢別では、年少児では 1 人から 5 人や 6 人ほど、年中児では 0 人や 1 人の日もあるが、だいたい 2 人から多いときは 10 人ほど、年長児では 5 人前後から 10 人ほどが各日遊んでいることが明らかになった。10 日間の総計を概観すると、年齢が上がるごとに鉄棒で遊ぶ幼児の人数が増えている。つまり、年齢が上がれば上がるほど鉄棒で遊ぶ幼児の人数が増えていくということが分かる。加えて、年少女児の高鉄棒を除き、いずれの鉄棒でも女兒のほうが遊んでいる割合が高く、基本的には年長になるほど高鉄棒で遊んでいる。

ちなみに、各年齢の幼児の人数は若干違うため、全幼児

の何%が鉄棒で遊んでいるかを計算してみたところ、年少児では男児が延べ 17%、女児が延べ 22%、年中児では男児が延べ 17%、女児が 32%、年長児では男児が延べ 34%、女児が延べ 47%、鉄棒で遊んでいることが判明した。あくまで計算上であるが、少なくない人数の幼児が鉄棒で遊んでいることが分かる。

各日ごとの鉄棒で遊ぶ幼児の人数を見ると、各年齢 1 人だけが鉄棒で遊んでいる日というのはあまりなく、0 人か、2 人以上という日が多い。これは、幼児が鉄棒に複数人で遊びに来ているのではないかということが推察される。また、男女別にみると、どの年齢でも男児より女兒の方が鉄棒で遊ぶ人数が多い。これは、女兒の方が複数人で一緒に遊びをする傾向が高いのではないかと推察できる。観察をしている中で、6 人

ほどの年長女兒が高鉄棒に群がり遊んでいる様子を見かけた。

4-3 鉄棒遊びの種類と人数

次に、鉄棒で遊ばれる遊びについてまとめる。

観察できた遊びは全部で 17 種類あった。遊んだ人数には、その遊びに挑戦しようとして失敗した人数も含めたが、「逆上がり」は延べ 167 人「前回り」は延べ 144 人と、幼児にたくさん遊ばれていた。「空中逆上がり」のような難しい遊びが遊ばれているのは、課外クラブである体操教室の影響があると考えられる。上記の 17 種類は、さらに整理すると 12 種類(①鉄棒に跳び乗る、②鉄棒の上に座る、③鉄棒にぶら下がる、④ぶたのまるやき(両手両足で鉄棒にしがみついた状態でぶら下がる。)、⑤足抜き回り、⑥尻上がり、⑦前回り、⑧逆上がり(完全形)、⑨逆上がり(未完成形。回転できない)、⑩鉄棒の回りをぐるぐる回る、⑪鉄棒の下をくぐっていく、⑫鉄棒の下で砂遊び)に分類できる。⑦と⑧の 2 種類は、小学校学習指導要領において、それぞれ「前回り下り」「逆上がり」または「補助逆上がり」といった技として指導項目に含まれていた。また、①と③と⑥の 3 種類は、小学校第 1・2 学年の鉄棒運動遊びの内容において、それぞれ「跳び上がりや跳び下り」「ぶら下がり」「易しい回転」として記載されている。

12 種類もの鉄棒遊びの中で幼児によって遊ばれる頻度

に差があった。たとえば、「④ぶたのまるやき」は年少児によく遊ばれていたのに対し、「②鉄棒の上に乗る」は年長児によく遊ばれていた。また、観察できた 17 種類の遊びを大きく 2 つの種類に分けると、小学校体育学習指導要領解説に例示されている遊びと例示されていない遊びとに分けられる。観察できた遊びの中で、小学校学習指導要領解説に例示されていない遊びのほうが多く、「すべり台」「地球回り」「二人技」「腕立て伏せ」の 4 種類のみだった。小学校体育学習指導要領解説に例示されている残りの 13 種類の技のうち、「跳び上がり」「布団干し」「ぶら下がり」「こうもり」「ぶたのまるやき」「つばめ」「足抜き回り」「尻上がり」「前回り」は低学年の項目で例示されている。補助付きの「逆上がり」と「こうもり下り」は中学年の項目で例示されている。また、「鉄棒の上に座る・跨ぐ」は直接的には指導要領解説に技として例示されていないが、中学年の項目で例示されている「転向前降り」を行うのに必要な技術であった。補助をつけない「逆上がり」「空中逆上がり」は高学年の項目で例示されている。

さらに、遊びごとに幼児によく遊ばれる遊びと、あまり遊ばれない遊びがあることが分かった。よく遊ばれるものには、逆上がり、前回りがある。あまり遊ばれないものにはすべり台がある。地球回りや空中逆上がりといった高度な遊びも、あまり遊ぶ幼児がいなかった。これらの結果から、幼児が鉄棒で遊ぶ遊びは、そのまま小学校の体育に引き継げられると考える。もしくは、小学校体育で習う遊びに影響されているとも考えられる。

4-4 鉄棒の種類による遊びの違い

ここで、鉄棒の種類に注目すると、高鉄棒でよく遊ばれる遊びと、低鉄棒でよく遊ばれる遊びには若干の違いがあった。両方の鉄棒共に、逆上がりと前回りが頻繁に遊ばれているが、高鉄棒では逆上がりをして遊ぶ幼児が多く、低鉄棒では前回りをして遊ぶ幼児が多かった。また、各鉄棒の遊ばれ方の特徴として、高鉄棒では、逆上がりができる幼児が、そのまま空中逆上がりに挑戦する幼児が多くおり、低鉄棒では、鉄棒の上に座ったり、跨いだりして乗って楽しむ幼児が多かった。この結果から、10 cm ほどの高さの違いでも、遊ばれる遊びに違いが現れることが分かる。年長ほど高鉄棒を使用する傾向があることから、年齢が上がるにつれて、高度な遊びに挑戦するため、それが

やりやすい高鉄棒を選んで遊んでいるのかもしれない。

5. まとめ

本研究では、幼稚園に設置されている鉄棒について、その歴史や先行研究を調査し、自由遊び時間に、幼児は鉄棒でどのくらいの人数が遊んでいるのか、また、幼児が鉄棒でどのように遊んでいるのかを観察をした。その結果、幼児は非常に頻繁に鉄棒で遊んでおり、その遊びに幅広い豊かさがあることが判明した。

鉄棒は、子どもが横になった木にぶら下がって遊んだのが始まりであった。しかし、それに必要な体力要素の懸垂力を買われ、教練道具として普及した後世界に広まった。そのため、日本に伝わった時にも鉄棒は体操競技としての色合いが強いものであった。

幼児の鉄棒遊びに関する先行研究はまだ数が少なかった。その中では、鉄棒がどのくらいの数の幼稚園に設置されているのか、前回りや逆上がりはどのくらいの割合の幼児ができるのかというような、実証的な研究は散見された。実証的な研究では、長い期間にわたり調査を続けていた研究もあった。幼児の鉄棒遊びに関する実証主義的研究の歴史はまだ浅いといえる。

園庭に設置されている鉄棒では、年少児・年中児・年長児どの年齢の幼児も遊んでおり、高鉄棒・低鉄棒どちらも、どの年齢の幼児も遊びに来ていたが、基本的には女兒のほうが鉄棒で遊んでいる割合が高く、年長になるほど高鉄棒で遊んでいる。

幼児によって鉄棒で何をして遊ぶのかはおおむね決まっていた。たとえば、年少児 A はいつも前回りに挑戦しようと跳び上がって遊び、年少児 B はいつもぶたのまるやきや、こうもりなどのぶらさがって遊ぶ遊びをしていた。空中逆上がりができる幼児がたまたまその日は鉄棒で遊ばなければ、その日鉄棒で空中逆上がりをして遊んだ幼児の人数が少ないということもあった。幼児は、自由遊び時間の鉄棒遊びで、自分ができそうな遊びをしていると推察できる。

幼児の鉄棒の遊び方は、大きくふたつあった。ひとつは、できる遊びを繰り返す行い遊び方である。10 日間の観察の中で、前回りしかない幼児、鉄棒に寄ったついでに逆上がりを 1 回だけして別の遊びにうつる幼児もいた。そ

のような自分ができる遊びをすることで、幼児は鉄棒に親しみをもって遊んでいた。

もうひとつは、挑戦する遊び方である。自分ができない遊び技に取り組むのは根気のいることであり、途中であきらめたりすることもあるが、鉄棒にくるとどこかでその技に取り組み、少しずつそれができるようになっていく。意欲と向上心を持った遊び方である。また、幼児は鉄棒で遊び技に挑戦したり、同じ遊びや似たような遊びを一緒にしたりして遊んでいた。

鉄棒遊びにおける幼児や保育者のかかわりには、想像力を持ったかかわりや、人間関係の形成やコミュニケーションの発達を促せられるようなかかわりがあった。鉄棒をはじめとする遊具は、屋内で遊ぶような電車のおもちゃなどとは違い、自然と他人と共同して使われやすいものである。入れ替わり立ちかわり他人と関わる機会と場があることで、遊びに豊かさがでてくると考えられる。今後の課題は、今回の調査結果を活かして、保育者が、幼児の自発的な鉄棒遊びにどのようにかかわるか、どのような言葉かけをしたり、環境構成をするのかである。保育者が積極的にかかわれば、おそらく鉄棒遊びがもっと豊かになる。それについて今後の研究テーマとしたい。

繰り返すようだが、本研究より、鉄棒は幼児に遊ばれている遊具であることが明らかとなった。10日間の観察のみでは、鉄棒に全く来ない幼児も多数いた。しかし、鉄棒であまり遊ばない幼児にとっても、鉄棒が園庭に設置されてあることで、鉄棒を身近な遊具として感じているのではないだろうか。鉄棒は園庭に設置されてあることで、意味をもつ遊具となっていたのである。

鉄棒遊びには、幼児の遊びとしても、保育者のかかわりにおいても、まださまざまな可能性がある。これからもその可能性を追求していけたらと考える。

註

- ・池田猪佐巳・岩丸茂雄, 1979, 『新体育学大系第30巻

体育施設用具創意集』, 逍遙書院。

- ・川村英男, 1979, 『新体育学大系第10巻日本体育史』, 逍遙書院。
- ・小黒美智子, 1995, 幼児の運動遊びに関する研究—園庭の遊具と幼児の運動遊びに関する調査から, 新潟青陵女子短期大学研究報告 第25号, 87-97。
- ・杉江栄子・鈴木文代・村岡真澄, 2012, 保育実践力の育成・向上に関する研究—5歳児の鉄棒の場面での指導・援助—, 愛知教育大学幼児教育研究第16号, 25-32。
- ・田代和美・中島寿子・内藤知美・柴崎正行, 1994, わが国における保育環境の歴史の変遷について:4 鉄棒日本保育学会大会研究論文集, 670。
- ・日本保育学会, 2010, 『日本幼児保育史 第6巻』, 日本図書センター, 123-128。
- ・橋本妙子, 1999, 幼児の固定遊具遊び—鉄棒, 登り棒, 雲梯遊びの観察および運動成就率, 横浜女子短期大学紀要 第14号, 67-76。
- ・藤本俊・清水紀人・新井重信・西川大輔・日向小百合・佐藤佑介・畠田好章, 2004, 「器械運動の基本的な捉え方. 第1報:歴史的背景に着目して」, 日本体育学会大会号, 535。
- ・宮沢秀次・館林拓磨, 2016, 保育園の遊具とその使用の時期および頻度, 名古屋経済大学人文科学論集 No. 95, 31-37。
- ・村山鉄次郎, 1967, 体操とヤーンについて, 明治大学教養論集, 14-24。

【謝辞】

今回、研究調査を行うにあたり、岐阜市の私立ながら幼稚園の園長・渡辺玲先生、主任・細川志保先生をはじめ多くの先生方にはご理解とご協力を賜りました。また、なにより第二幼稚園教諭の牧野瑠梨先生にも熱心に調査にご協力いただきました。ここに記して謝意を表します。